



Title	指標性と直接指示の理論の関係について
Author(s)	小山, 虎
Citation	年報人間科学. 1999, 20-1, p. 61-77
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/11148">https://doi.org/10.18910/11148</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 指標性と直接指示の理論の関係について

小山虎

### 〈要旨〉

直接指示の理論は単称名詞の指示に関してよく知られている立場のひとつである。とは言え、それが一体どのような立場なのかは意見が分かれる。本稿で私は、「直接指示」概念の導入者であるD・カプランに基づいた直接指示の理論的根拠を批判的に検討する。

カプランによる特徴づけが持つもつともらしさは、彼による指標詞の分析に由来する。それによれば、命題そのものは指標詞が持つ文脈依存性によって全く影響されず、その結果、指標詞にとって命題と有意な関係にあるのは指示対象に尽きる。

彼の分析は多くの論者によつて受け入れられているが、その一方で、指

標詞に関心のある言語学者や言語学的傾向が強い哲学者が、例を挙げる」とでカプランの分析の不十分さを指摘している。

これらの例は派生的な用法として軽視されがちであるが、実際には、通常の用法と区別して処理すべきであるということを示すのは容易ではない。逆に、指標性を共有すると考えられる周辺的な事例も考慮に入れるならば、

むしろ指標詞は、その派生的と思えるほどの用法も可能にするような文脈依存性を持つてゐると考えられるのである。

このことは、指標詞がカプランやその同調者達が考えるよりも文脈依存的であり、直接指示の理論に至る指示の直接性をそこから導き出すことができないことを示している。指標詞についての適切な見方の下では、直接指示性はまた別の仕方で現れるだろう。

### キーワード

指標性、直接指示の理論、指標詞、D・カプラン

## 1 はじめに

自然言語の意味論において、単称名辞の指示にまつわる問題は避けて通ることができない。「クスペラス」と「フォスフォラス」や「ウェイヴァリーの著者」についての議論以来、固有名や確定記述については数多くの議論が積み重ねられてきた。しかしながら、このことは単称名辞の指示の理論が完成しつつあることを意味しているとは限らない。むしろ、今だ我々はどの単称名辞についても指示の理論を手にしたとは言い難い。とは言え、議論が全く渾沌としているわけでもない。直接指示の理論 (theory of direct reference) と呼ばれる考え方は、その中でも有力な立場の一つである。

直接指示の理論は内包論理、とりわけ様相論理にまつわる哲学的

議論に端を発し、現在は主に、信念文に代表される命題的態度 (propositional attitude) の意味論に関して議論されている。ソシード直接指示の理論が大きな役割を果たしていることは確かである。なにしろ、直接指示の理論にしたがつたアプローチによつて信念文の意味論は可能かどうかという問題が議論の中心となつてゐるほどである。

そこまで直接指示の理論が支持される理由は何だろうか。少なくともその一つは、直接指示の理論が、単称名辞に関して広く受け入れられている素朴な直観に動機づけられていることである。その直観とは、固有名や指標詞は、確定記述に比べて、直接に（あるいは

純粹に、または端的になどとも言われるが）指示を行つてゐるという直観である。つまり、固有名や指標詞の指示は確定記述よりもある意味で直接的であることを我々は直観的に理解している。この直観に対して、直接指示の理論では（少なくともその一般的に知られた種類では）固有名や指標詞は確定記述と異なり直接指示的である。すなわち、これらの表現は直接指示性を持つとして説明されるのである。

私には、この直観が我々の言語実践を何らかの形で反映したものだと思われる。したがつて、単称名辞の理論は、この直観を説明しなければならない。このように考へると、多くの哲学者が直接指示の理論に影響された立場に立つてゐることとは自然であると思われるところだろう。また、そういう立場から命題的態度に関する問題に取り組むことも健全であると思われるかもしれない。

だが、私の見るところ、直接指示の理論には大きな問題がある。そもそも、「直接指示性を持つ」または「直接指示的である」と言われる」とで一体何が主張されているのだろうか。もしそれが我々の直観的理説の單なる言い換え以上のものであるならば、きちんと定式化されるべきであろう。

本稿では、直接指示の理論の中心的なテーマとそれを支持する議論を検証していきたいと思つ。その際、指標的表現についての分析は重要な位置を占める。なぜなら、直接指示の理論の生い立ちは指標詞と密接に関連してゐるからである。よつて、誤解を減らすために、ここで前もつて用語を整理しておくことにする。

単称名辞の中には、その意味や指示対象、あるいはその単称名辞を含む文の真理条件が、発話された文脈なしには決定できない表現が存在する。このことを、これらの表現の意味は、発話された文脈が持つ様々な文脈的要素（これは指標（index）と呼ばれる）に依存していると言つてもよいだろう。そのような表現を以下では指標的表現と呼ぶ」とする（もちろん、この定義では単称名辞以外の指標的表現も許容される）。また、そのうち、何か（誰か）を指差しながら用いられる「あれ」や「彼女」のように、文脈的要素だけではなく、指差し行為などの直示行為が必要に思われる表現を直示語（demonstrative）とし、「私」や「今」のように、必ずしも直示行為を必要としないと思われる表現を指標詞（indexical）と呼ぶ」と記す（<sup>1)</sup>。

## 2 直接指示の理論とはどのような理論か

### 2・1 カプランによる直接指示の理論の特徴つけ

「直接指示の理論はどのよくな理論か」という問いに正しく答えることは決して容易ではない。その原因の一つは、直接指示の理論には様々な呼称が存在するからである。例えば、我々は「指示の新理論（new theory of reference）」とか「指示の因果説（causal theory of reference）」いわれられる理論を耳にする。だが、これらの呼称どうしの関係は必ずしも明示的なものではない。

また、直接指示の理論が何を主張しているのかといふ問には

様々な答えが存在する。いわく、直接指示的な表現は固定指示子である。直接指示表現は因果的（歴史的）連鎖によって指示対象と結びついている。直接指示表現を含む文は単称命題を表す。直接指示表現を含む文は単称思想を表す。直接指示表現は端的に対象を指示する、等々。これらに代表される、直接指示の理論の名と関連して語られる主張は、もちろん全く無関係な主張の集まりではない。だが、それぞれ独立して主張する」とも可能である（現に、ある理論は別のある理論と両立しないという議論や、二つの理論が独立であることを示そうとする議論も存在する）。これらの主張どうしの関係も決して明白とは言えない。私には、このことは、何が直接指示の理論の中心的なテーマなのかが正しく認識されていない」と示してゐると思われる。

とは言え、直接指示の理論の主張する理論家たちに共通点を見つけることは困難ではない。彼らの著作の多くで、自分の考え方が直接指示という観念によりてうまく捉えられており、そして、この観念がD・カプランに由来する」とが明らかにされているからである。したがつて、直接指示の理論の持つもつともいわしわの源がカプランによる直接指示という観念の説明にあると言える」とは方針として認めてよいだろう。そこで、カプランの考へる直接指示の観念がどのようなものなのを始めに見てみる」と記す。

カプランがはじめに直接指示的であることを明確に規定した文章は次のものである。

「…私は、「直接指示的である (directly referential)」という言葉を、その指示対象がいつたん決定されば、すべての可能な状況で指示対象が固定されると見なされる表現、すなわち、その指示対象が命題の構成要素であるような表現に対し用いることにする。」<sup>(2)</sup>

この文章でカプランは「一体どのような」とを言わんとしているのだろうか。要点は、この引用の中の「すなわち」以降の部分にある。つまり、直接指示的な表現を含む文によって表される命題（命題が文によって表される）とは言うまでもない）は、その表現の指示対象を構成要素として含むことが主張されているのである。

カプランは自分の命題観念を「乗り物」に喻える<sup>(3)</sup>。命題は、話題

となつていて個体や性質を乗せ、真偽が問われる状況へ運ぶ乗り物である。そしてその状況において話題となつて個体や性質が命題と同じ構造をしていればその命題は真であり、そうでなければ偽である。このよう命題に構成要素として含まれる対象は真理値を評価する際に決定的な役割を果たす。このことを命題が対象依存的であると言うとすれば、直接指示的な表現の場合、指示対象がまさに話題となつていて対象となるので、そこで表されている命題は、その直接指示表現の指示対象に依存するということになる。つまり、カプランは指示の直接性を命題の対象依存性によって実現しようとしているのである。

カプランが「」のように考える理由は容易に想像できる。確定記述のような量化を含む文によって表される命題は対象依存的とは思われない。その一方で、前節で述べたように、指標詞や固有名の場合には明らかにもつと対象に密着しているようと思われる。このような表現を含んだ文によって表される命題は指示対象と本質的に関わらなければならぬ。特定の対象を構成要素として持つ命題であれば、ここで要求されている対象依存性を持つはずである。よって、直接に指示を行つて思われる表現は指示対象が命題に構成要素として含まれていると考えれば全ての要求を満たすことができるのではないかだろうか。

ここで、直接指示的であることを次のよーなテーゼの形で表現してよいように思われる。

(D R) ある表現が直接指示的であるのは、その表現を含む文が表す命題が、その表現によって指示された対象そのものを構成要素として含んでいる場合であり、かつその場合に限る。

多くの直接指示論者は (D R) を受け入れるだろうし、(D R) それ自体には何も問題はないと思われる。しかし、そのことは直接指示の理論の妥当性を含意しているわけではない。一つ疑問点を指摘しておこう。確かに量化を含む文とそれ以外の文は別の種類であると考えてよいように思われるし、それらを区別することは有意義であるかもしれない。だが、それは命題に関する区別でなければならない

いのだろうか。また、(D R) そのためには不可欠なデータなのだろうか。

この疑問に対するカプランの答えは恐らく次のようなものである。まず、指標詞を含む文は対象依存的命題を表すと考える根拠が存在する。このことは明らかに(D R)を示唆している。そして(D R)は指示の直接性に関する我々の直観を明確な形で説明することに寄与している。確かに他の方針を採用することも不可能ではないかもしない。だが、以上の事実を考慮すれば、もつとも良い方針は(D R)を受け入れることである。

そこで、以下でその議論を検証し、そしてカプランが問題としている現象はむしろ(D R)を含意しない形で解消すべきであることを示していくことにする。その結果として、我々が採るべき方針にとって(D R)は何の役割も果たさないことになるだろう。

## 2・2 カプランによる指標詞の分析

カプランが前節の引用部分の主張するに至った議論はよく知られている。それは一九七七年の論文「直示語」<sup>(4)</sup>において彼が行った指標詞の分析に由来する。また、そこで重要な役割を果たしている例が「私は今ここにいる」であることもよく知られたことであろう。恐らくこの分析はほとんどの直接指示論者に受け入れられている標準的なものである。そこで、まず初めに有名なカプランの分析を振り返つておくことにする。

(1) 私は今ここにいる。

指標詞と直示語といった指標的表現が他の単称名詞と本質的に異なる点は、指示対象が文脈的要素に応じて変化することである。指標的表現に対して我々が持っている直観的理説は恐らくこのようなものだろう。よって、指標詞の意味論の課題は、どのようなメカニズムによってこのことが実現しているのかを説明することである。

この課題を達成するためのひとつの方針は、表現の指示対象をその表現の外延とすることである。つまり、指標的表現の外延は文脈的要素から決定され、指標的表現の内包は文脈的要素（これは発話した主体や発話された時点や発話された地点などをパラメーターとして持つと考えられる）から指示対象を与える関数であるとみなす。このことを踏まえて構成された言語（あるいは、これに従う言語）においては、指標的表現を含む文は、その使用（例えば発話）に対して文脈的要素が与えられないかぎり真か偽か決定できない。これは歓迎すべき結果である。例えば、ただ単に「私は男である。」（この文では「私」が文脈的要素を補完されるべき指標的表現である）という発言があつたとしても、誰がこの文を発話したのか決定されなければ簡単にこの文に真偽を判定することはできないという事実と一致する。

しかし、これだけでは指標詞の分析としては十分ではない。このことは次の例によつて示すことができる。

指標詞に関して(1)が持つ特徴的な点は、そこに含まれる各指標詞の意味からすれば、(1)は常に真となるように思われることである。よ

つて、ここまで考え方方が正しいのであれば、(1)がこの言語の論理によつて真であることが決定される（すなわち「し真」である）といふ意味で「論理的真理」（あるいは「論理的に」真）であることが期待される。ところが、このままでは期待される結果を得ることはできない。

この言語では、通常の論理的真理に加えて、どのような文脈的要素が与えられても真となる文が「論理的真理」となる。だが(1)はこのような文ではない。(1)が真になるためには、「私」の指示対象が「今」によつて指示される時点において「今」によつて指示される地点に位置していなければならぬ。一方、「どのような文脈的要素が与えられても真」になるためには、全く無関係な主体と時点と地点を含む文脈的要素に対しても真でなければならない。したがつて(1)は、文としての身分が大いに異なるように思われるにもかかわらず、

(2) デヴィイツド・カブランは1973年4月、ロサンゼルスにいる。

と同様に経験的に真偽が判明する命題を表す文となる。

ここで文脈的要素に何らかの制限を加える、例えば、現実的に不可能な組み合わせを除外する、といったことを行つて(1)が「論理的真理」となるよう調整しても異なる問題が生じる。

(3) □（私は今ここにいる）

(1)が「論理的真理」であれば、(3)も同様に「論理的真理」となる。だが、この結論が問題であることは明らかである。(3)はほとんどの場合、偽である。自分が現在他の地点にいる可能性を認めない人はいまい<sup>(6)</sup>。

「今」でカブランが取るアプローチは以下のようなものである。指標詞の意味論的機能が全体としてどのように機能するのかという点について、ここまで考え方は正しい。しかし、指標詞の持つ個々の機能がどの段階で機能し、どの段階で機能しないのかという点については誤つてゐる。と言うのも、指標的表現の独自性は文が使用された文脈との関係にあるであり、真理値が評価される状況については他の表現と変わりはない。ところが、ここまで議論ではこの二つが混同されている。そして、この「文脈」と「状況」を明確に区別すれば、(1)と(3)が同時に「論理的真理」になるという回避すべき帰結は導きだされない。と言つても、(1)はどの「文脈」に対しても真である命題を与えるかもしれないが、(3)はある特定の(1)の発話が必然的であることを表す文である。ある特定の(1)の発話によつて与えられる命題の必然性は（反事実的状況を含む）様々な「状況」に対して評価される。当然、これが真となる場合はほとんど無い。

「今」で注目すべきことは、命題が評価されるのは「状況」に対してであるということである。このことは、命題がもとの文が使用さ

れた文脈と切り離されたものであり、そこではもはや文脈依存性を持つ表現が使われていたことは失われる。つまり、指標的表現の特徴である文脈依存性は命題には反映されないのである。

では、文脈依存性（さらにはそれを実現する意味論的機能）を除けば、指標詞の命題に対する貢献としてどのようなものが考えられるだろうか。カプランは、それは指示された対象そのものであると言ふ。同時にカプランは、文脈依存的ではない確定記述の場合は、指示対象ではなく、記述によって与えられた性質が命題に対する貢献であると言ふ。ここで、指示の直接性に関する我々の直観を次のようく説明することができよう。確定記述と指標詞という統語論的な区別から指示に関する直観的な違いが生じるのは、この区別が命題の構造に反映した意味論的な区別でもあるからである。

### 3 別の分析

#### 3・1 直示的用法

ここまで見てきたカプランの分析は、指標詞を形式的に扱うことを目的としたものである。指標詞に何らかの規則性があることは明らかなので、指標詞にそのような「論理」が存在することはもつともなことだと思われるかもしれない。しかし、いかなる意味で「規則的」なのだろうか。実際に、指標詞の規則性はカプランが考案しているほど単純ではないと考える言語学者や言語学的傾向が強い哲学者が存在する。ここで彼らの議論を見ておくことは有益であろう。

前節で見た分析においてカプランが行った指摘のうち、評価されていることの一つは、(1)は普遍的に真であるということである。だが、それは本当に指標詞の意味により達成されるべきものなのだろうか。確かに、指標詞に関して我々が持っている直観は(1)が常に真となることを予想させる。ところが、実際には偽である(1)の発話が存在するということは多くの論者によつて指摘されてきた。最もよく見掛けられる例は次のようなものである。私は旅行中に道に迷つてしまい、現在位置を確認するために地図を広げた。周囲の風景などから現在位置を推測し、地図上のその地点を指差して「私は今ここにいる。」(つまり(1))と言つた。しかし、私の推測に誤りがあり、間違った地点を指差していた。このとき「(1)」で指されているのは、本当は私はそこにいないのだが、間違つて自分がそこにいると思つてゐる地点であろう。<sup>(6)</sup>

この例に対してカプランの分析を擁護する論者に多く見られる反応は、これは指標詞として使われる語に直示語としての用法があることから生じる問題に過ぎない、というものである。つまり、この現象はカプラン自身が言及している「逸脱した指示 (deferring reference)」だというわけである。

しかし、これは本質的な反論ではない。この例のように実際に直示行為が行われた場合では、直示語と判断されてもよいようにも見えるが、例えば、留守番電話に吹き込まれたメッセージや、あとから来る人に自分がいることを教えるために書かれたメモのように、直示行為が存在しない場合もありうる<sup>(7)</sup>。さらには、もし発話地点

以外を指示する「」」を全て直示語として区別すると、例えばクロマキー撮影された番組で出演者が(1)を発話した場合のよう一見通常の意味で指標詞が用いられていると思われるケースも同様に直示語に分類されてしまう。

S・プレデリが指摘するように<sup>(8)</sup>、記録された発話（録音メモセージやメモ）の場合、実際に問題となる発話を個別化する条件にして意見の不一致がありうる。このような例の特徴は、発話が実際に生産された状況と発話が解釈される状況とが同じである場合が少ないことである。このとき発話主体が実際に行つた行為は生産された状況において行われるが、聞き手や読み手が発話を解釈するのは地点や時点が異なる別の状況である。

通常の会話時と類比的に、録音することやメモを書くことといった発話の生産のみが真の発話であると考えると、これまでの例が説明できることは明らかである。また、発話の解釈こそが真の発話であるとしても、発話主体によつて意図されてなかつた状況で発話が解釈された場合、この立場では発話主体がどう意図していようとも解釈された時点や地点こそが問題となることになる。つまり、一度発話の材料を生産してしまえば、それがどのような発話となるかは発話主体の手を離れているのである。

発話主体には発話の材料を作つた責任があるという意見は否定されねべきではないが、発話主体は責任を全て背負わなければならぬと考へる理由は無いようと思われる。自分の留守番電話用に吹き込んだテープが他人の留守番電話に使用されたからといって、私は、

それが他人の家についての自分の発話であることを否定してもよいように思われる（そうでなければ、市販の留守番電話に前もつて準備されているメッセージの録音を一体誰が引き受けるのだろうか）。むしろこの場合、私の発話は私の手を離れ、もはや私の発話ではなくなつたと言うべきだろう。

ここで挙げた例は日常的ではあるが、普通考査の対象となつてゐる会話の場合は明らかに区別されるものであろう。しかし、私はこれらの例は、指標詞の持つ文脈依存性がカプランが考える以上に強いことを示してゐるようと思われる。むしろ、特殊な文脈を想定すれば、一般的には排除されているようと思える（つまり使用不可能に思われる）ケースも可能となるということはないだろうか。もしそうならば、そのことを可能にするような指標詞の規則性に対する見方が求められるべきである<sup>(9)</sup>。

### 3・2 記述的用法

前節で挙げた例は、指標詞とその指示対象の結びつきはカプランの考へるような純粹に論理的な関係ではなく、文脈によつて左右されるような語用論的な関係であることを示唆してゐる。実際、ほとんどの指標詞に対し同様の例を挙げることができる。しかし例外は常に存在する。「私」は他の指標詞とは異なり、話し手以外の対象を指示する例を日常に見つけることは一見困難である。このことから、少なくとも「私」に関しては（D R）は妥当であると考えられるかも知れない。

ところが実際には、「私」に関してすら指示対象は話し手に留まらないと考へられるのである。G・ナンバーグは、「私」を含む文であるにもかかわらず、主体そのものではなく、主体の持つ性質が問題となる場合が存在すると言つ。彼は、このとき指標詞は帰属的に使用された確定記述のように振る舞うと主張する。この、指標詞の「記述的用法」は決して広く知られているとも受け入れられているとも言えない。だが、カプランの分析の妥当性を測るという目的にとつては興味深い主張である。

確定記述に指示的用法と帰属的用法があるというK・ドネランの主張は有名だが<sup>10</sup>、指標詞にも同様のことが当てはまり、そのうち確定記述の帰属的用法に対応するのが指標詞の記述的用法である。ナンバーグは具体的な例として次の例を挙げている。ある死刑囚が刑務所の慣習について次のように述べたとする。

(4) 私は最後の夕食に好きなものを注文することが慣習で許されて いる。

(D.R.)によれば、(4)の表す命題は、「私」の指示対象である特定の個体（すなわちこの死刑囚）がこれこれの性質（つまりこのようないことが許されていること）を持つことを表す単称命題以外にはありえないはずである。しかしながら、これは唯一の可能な読みではない。例えば次のような別の読みも可能であるように思われる。この死刑囚は、自分が死刑囚であることが聞き手に知られていることを

踏まえて、自分自身が独自に持つような性質について語ったのではなく、彼の身分がそのような性質を備えているということ、つまりこの刑務所の死刑囚はそのようなことが許されていることを語つた。彼にこのようなことが許されているのは、ただ単に彼がそういう性質を持つからというだけではなく、彼がこの特定の刑務所の死刑囚であるという身分を持つからである。この場合、(4)の表す命題は、特定の対象に依存せず、死刑囚が誰であれ、彼が属する刑務所等の慣習としてそのようなことが許されている場合その場合のみ真である一般命題である<sup>11</sup>。

だが、このような読みが存在することを認めるとしても、それは何に由来するのだろうか。ここに何らかの語用論的なプロセスがあることは明らかだと思われる。ということは、この現象は、確定記述の二つの用法に関する時に主張されるように、発話の状況や話し手の意図と関わる会話の規則から生じる現象ではないだろうか。つまり、単に派生的な解釈に過ぎないのではないだろうか。

ナンバーグはこの現象をそのように見ない。実は、カプランは指標的表現全般に対して考察したのではない。カプランの関心は単称名詞にあり、複数形の指標的表現については何も述べていない。複数形が意味論においてどのような役割を果たしているのかについて我々は明確な展望を持つていない。だが、指標性に関する限り、単数と複数に違ひはないと言えることは不自然とは思われない。

複数形の指標詞に対してカプランの分析が不十分なことは言つま

でもない。「私」と「私たち（私たし）」は指示対象が単数なのか複数なのかが違うだけであると考えるのであれば、「私たち」の指示対象は文脈的要素が与えられるだけで決定できなければならない。だが、このことは「私」の場合のように簡単にいいかない。「私」の指示対象を決定するうえで重要な文脈的要素は発話の主体である話し手である。しかし、「私たち」は話し手が複数の場合のみ使われる表現ではない。むしろ、「私たち」が使用されても話し手は単数の場合が一般的である。一体どのようなメカニズムで一人の話し手から複数の指示対象が決定されるのだろうか。このことを単に語用論的問題として片付けることはできない。なぜなら、どのような集団についての言明なのが決定されなければ、「私たち」を含む文の真理条件も決定されない。つまり、「私たち」を含む文が表す命題を特定するためには、話し手を特定するだけではなく、話し手を含む「私たち」によって指示されている集団も決定しなければならないのである。

よって語られる指示対象は明確に区別されるべきなのである。<sup>12)</sup> 彼によれば、「私」と「私たち」は共に話し手を指標として文脈から選び出す。つまり、単数であれ複数であれ、指標的表現の指示対象を決定するための文脈的要素そのものは同じである。ただ、指標からさらにもう一段階を経て選び出される指示対象が「私」の場合は個体であることが要求されることに対し、「私たち」の場合はそのような要求はない。

ナンバーゲの主張通りに指標と指示対象を区別して考えたところで、カプランの議論の結論には何の影響もないようと思われるかもしれない。そこで、次の例について考えてみたい。アメリカの最高裁判所のある判事が次のように語つたとする。

#### (5) 私たちは民主党員かもしけなかつた。

この「私たち」の指標となるのは話し手の判事である。そしてその指標から指示対象として選び出されるのは話し手の同僚である最高裁を構成する判事の集合である。つまりこの文は、発話時点での最高裁の構成員それぞれについて、その人が民主党員だった可能性もあつたという内容を表していると読める。

しかし、明らかにこの文には別の読みが存在する。次の(6)を見て関する限り、指標と指示対象はほとんど常に同じ対象であるように見える。だが、何がこれらが常に同一の対象であるということを要請するのだろうか。むしろ、文脈から選び出される指標とその文に

(6) もし先の大統領選で民主党が勝つていれば、私たちは民主党員

かもしだれなかつた。

(6)で付け加えられた従属節は主節に何ら意味論的影響を与えるものではない。それでも、(6)は発話時点では実際には最高裁の判事ではなかつた民主党員によつて最高裁が構成されていた可能性があつたと読む方がより自然であるようと思われる。明らかにこの読みでは話し手は(6)の真偽にもはや影響を与えない。だが、この読みは一体何に由来するのだろうか。

ここでナンバーゲは確定記述に注目する。(5)の指標詞の部分を指示対象を同じくする確定記述で置き換えた文である次の(7)を(5)と比較して欲しい。

(7) 最高裁を構成している判事たちは民主党員かもしだれなかつた。

これが、実際とは異なり民主党員によつて最高裁が構成されていた可能性があつたと読めることは明らかである。そしてその一方で、確定記述が指示的に使用されたと考えれば、発話時点での最高裁の構成員それについて、その人が民主党員だつた可能性もあつたと読むことも可能である。

さらに注目すべきことに、明らかに(6)では、指標詞の指示対象が決定されなくとも、指標さえ決定されれば記述的用法が成立しうるようと思われる。例えば、秘密保持のため、最高裁の判事は互いの顔を知らず、何名で構成されているのかすら知らないという場合で

すら、指標である話し手の判事だけが明確でさえあれば(6)は理解可能であろう。したがつて、たとえ「私たち」の指示的用法が失われたとしても、そのことは(5)を記述的に読むことを否定しないだろ。これは、記述的用法が必ずしも指示的用法に依存していないだということを示すように思われる。

それでもなお、次のように思われるかもしだれない。なるほど、複数形の指標詞には記述的用法と呼べるものがあるのかもしだれない。しかしながら、たとえそうだとしても、指標詞が本質的に記述的用法を持つのであれば、複数形の場合と比べて単数形の場合に記述的用法があまり見掛けられないのはなぜだろうか。明らかにこのようないが生じる原因是、指標と指示対象の関係が単数と複数では異なることにある。複数の場合、指標と指示対象との関係は非常に不明瞭である。一方単数の場合、指標が指示対象と常に同一であると考えることは不可能ではない。現在、複数形がスムーズな形式的扱いを簡単に受けるものではないことは知られている。すると、結局のところ、記述的用法とは複数形に由来するものであつて、その源を指標性に求めるとは誤りではないだろうか。

複数形は様々な問題点をはらんでおり、それらを全てここで論じることはできない。しかしながら、次の二点を指摘することができる。まず第一に、複数形のもつ複雑さが注目されたのは、複数形の照応表現が単数形の照応表現の理論では扱えない問題を提起するからだつた。照応表現では複数形にしか見られない現象があるからと言つて、指標詞も同様であると考える理由はない。逆に、指標詞で

は従来は複数形にのみ現れると思われていた現象が単数形でも生じるのであれば、照応表現でも同様ではないかと考えることもできる。また、最終的な照応表現の理論が単数形と複数形を包括的に扱つものとなることも十分ありうる。つまり、照応表現では複数形が問題となるからと云つて、指標詞の記述的用法が否定されるわけではない。第二に、現在、標準的な複数形の理論があるわけではない。ナンバーグは、複数形でしか生じないと思われがちな現象のひとつが複数形以外に原因を持つことを主張しているわけなので、これは複数形の理論にとつての貢献もあるかもしれない。少なくとも、この現象がどこまで複数形とかかわり、どこまで指標詞とかかわるのかは議論の余地があることである。

私には、ナンバーグが示した現象は、カプランのようなスタンスでは説明できないようと思われる。カプラン自身の関心は、このような語用論的とも言える個々の例外的な事例を全て説明することよりも、我々の知っている指標詞におおよそ適合する論理を構成することと自然言語の体系的意味論のために必要ないいくつかの重要な点を明らかにすることにあつただろう。だが、自然言語にとつてナンバーグの挙げるような例は中心ではないにしても決して無視してよいものではない。自然言語にとつてこの程度の変則性は十分許容できる範囲である。その余地を残さない説明は、説明として不適格である。

ナンバーグはそのような変則性を認めつつ、指標詞全体を包括的に捉えようとしており、その点ではより優れているとも言えるだろ

う。しかし、彼の説明には無視できない問題点があるようと思われる。と言うのも、ここでの指標詞は単に記述として振る舞つてゐるのではない。確定記述のひとつの大きな特徴は、指標対象の存在が要求されることである。一方、指標詞の記述的用法を認めたとしても、話し手が存在しない場合は意味不明となるという意味で指標詞の指標対象は不可欠である。よつて、指標詞が確定記述と同じ読みを持つと言うためには、指標対象の存在に依存しない必要がある。だが、彼があげるどの例も（複数形も含めて）話し手の存在が必要ではないと言えるものではない。また、彼は、このとき指標詞を含む文によつて表されている命題には指標対象そのものは含まれず、その指標対象の持つある性質だけが含まれると言うが、その命題には指標対象である話し手が本質的に関与しているはずである。そのような命題は対象依存的命題であろう。

とは言え、ナンバーグが(4)で感じたであろう奇妙さは確かに存在すると思われる。確かに、単に指標対象そのものが命題の構成要素であると言つだけでは、このような読みが何らかの意味で存在することを全く説明できない。彼の説明が正しくないとしても、ここで指標対象の持つ性質のひとつが明らかに問題とされているという指摘はもつともであると思われる。

実際のところ、文の内容の中に話し手の身分が含まれているように見える例はそれほどまれではない。例えば、外務大臣が条約に調印したことを「私は調印した。」と報告したとき、彼が外務大臣であるということはこの報告の内容にとつて不可欠な部分である。なぜ

なら、彼が外務大臣でなければ彼が行つたことは調印ではなく、たしかに特定の箇所への署名に過ぎないからである。このことは、文の内容ということで、文によって伝達された内容、あるいは情報内容を考えるのであれば、よりもっともらしく聞こえるだろう。

この、外務大臣が条約を調印したということについて反事実的状況が問題となるとき、(D R) から問題が生じる。実際の外務大臣がその職に就いていないような状況ですら、もとの「私」の指示対象が問題となってしまうからである。カプランが念頭に置いている命題モデルによれば、実際の外務大臣その人を彼が公務に全く就いていないような状況に連れていかなければならなくなるだろう。このような場合は、指示対象その人ではなく、彼の身分が問題となるケースも十分ありうる。我々に求められているのは、このことを可能にする命題観である。

この考え方に対して予想される反論の一つは、仮にこのような解釈も可能だとしても、それは字義的な解釈から派生的に得られたものに過ぎないといふものである。つまり、このような例外的なケースは語用論によって処理されるべき問題であり、純粹に意味論的場面では問題とすべきではないのである。

しかしこのような反論に対しては次のように言つことができよう。まず第一に、この反論では、問題となる対象が指示対象に尽きないケースが存在することは否定されない。したがつて、指標詞の実際の用法を見る限り、直接指示性を持ち出すことは何の役にも立たない

い。だとすれば、何が純粹に意味論的な場面を話題とすることによってこのような用法を排除することを要請するのだろうか。そもそも、字義的な意味はそれほど重要な存在なのだろうか。第一、字義的な意味とは、一般的には、実際に用いられる意味とは異なるという含みを持つ。

我々は言葉の通常の使用に対しても、それがどのような意味かを知る術を持っている。しかし、この役割を果たしているものは字義的意味であると考える必要はない。我々が日常的に体験しているのはその言葉がどのように使われるかを示すデータに過ぎない。そこから普遍的な、または本質的な何かを知つたのだと想定する必要はないのである。

また、いかに派生的に見えようとも（言語能力の達成といった面では実際に派生的かもしれないが）初めに字義的解釈が行われ、そこのあと派生的な解釈が推論されるというモデルは必ずしも必要ではない。このような変則的な用法を理解するためには初めは字義的解釈を経る必要があるかもしれない。しかし、いつたんこのような用法が身に付けば、あとは字義的解釈を理解するよう直接に理解できるようになるだろう。

このような考え方の下では、指標詞の指示の直接性は新たな装いで現れる。手短に述べると、話題にされていいる状況に関する限り、話題は命題にとつて本質的に関与している必要がある。しかし、問題が初めの状況を離れて他の状況も巻き込むようになれば話題はもはや必要とされない。つまり、指標詞が相対化される外延的文脈

のみが問題となる限り、表されている命題は話し手に依拠した対象依存的命題と言つてもよいだろう。しかし、一度内包的文脈が考慮のうちに入れば、話し手そのものは命題とは切り離すことができなければならぬ。よつて、指示の直接性とは、外延的文脈に、それも指標詞が相対化された文脈に限られたものなのである。<sup>(13)</sup>

#### 4 意味論と語用論

指示の直接性が外延的文脈でしか成り立たないといつゝとは、単に、直接指示の理論には部分的修正が必要であるといつゝとを意味しているのではない。指標詞や固有名の指示対象が内包的文脈でも固定的であるという考えは直接指示の理論の出発点のひとつである。現在まで行われている直接指示の理論にまつわる多くの論争<sup>(14)</sup>も、内包的文脈での指示の固定性が何に基づくものかという問い合わせに対しての異なる二つの立場の間で行われている<sup>(15)</sup>。このよつたな議論の前提自体に疑問が投げ掛けられているのである。

とは言え、内包的文脈に関しての我々の直観はそれほど強固なものとは言い難い。また内包的文脈そのものも、何か曖昧で分析不可能な概念のようにも思われるかもしれない。よつて、指示と内包的文脈の分析を結び付けて考えることは、魅力的な方針とは思われないだろう。

しかし、現在、直示語の指示対象に関する議論では、まさにしつゝのよつたな内包的文脈を視野に含めた上で語用論的問題として指示の

問題を考えるべきであるといつゝとが多くの論者によつて認識されている<sup>(16)</sup>。そして、指標詞の分析に関する議論が示していふことは、従来純粹に意味論的であると思われてきた問題も、その語用論的側面を切り離して考えることはできないといつゝとである。このことは、指示の理論から得られる言語に関する知見は個々の事例にのみ関わる瑣末なものであるといつゝとではない。むしろ、その一見瑣末に思われる知見こそが言語のより良い理解について重要なのである。

#### 注

- (1) この呼称はほぼカプランの定義に従つてゐる。Kaplan [1989], pp.489-91.を参照のこと。ただし彼は「指標詞」という呼称を「指示語」という呼称も、指標的表現全般を指す場合にも用ひる。このあたりで言つた直示語のことを「真正直示語 (true demonstrative)」そして指標詞のことを「純粹指標詞 (pure indexical)」と呼んでゐる。

(2) *Ibid.*, p.493.

- (3) この乗り物としての命題観念の利点は、真理条件から説明することができない、反事実的状況における真理評価に関して指示の固定性が成立することを説明である点である。このあたりについては Recanati [1993]の第一章を参照されたい。

(4) 念のために書いておくが、この論文は、Kaplan [1989]である。

(5) ハリまでの説明は *Ibid.*, pp.507-9.に基づいてゐる。

(6) 同様の例を上げる文献は数多くあるが、特に、最も様々なバリエ

ーションがあげられてくるSmith [1989]を参照された。

(7) カルタージャンのキャラクターは、その紙は指差しの代わりとなる。「代理の指 (proxy-finger)」として機能してくると直示 (Colterjohn and MacIntosh [1987], p.59.)。しかし、直示行為が明らかに省略されたような場合でもこのように直示行為が存在しないにもかかわらず直示語であると主張する」とは、指標詞と直示語の区別の根本的な改訂を要求するようと思われる。そもそもカプランによる区別自体が記述される必要があるとも考えられるが、それにして、指標詞と直示語がどのように区別されるのかが提示される必要がある。

(8) Predelli [1998], pp.108-9.

(9) この節で議論の対象となる表現が「「」」に限られてくるふらんへ事実じ気付くなど。やるやく「「」」は「やく」(やく)も指標詞ではないとも考えられるかもしだれ。指標詞のバラダイムのみなれる表現が「私」であるふらんからも「」のふらんへゆくゆくしと思われるだらう。しかし「私」以外の表現を指標詞から排除する」とは何ら解決をもたらすものではない。ところのば、の立場ではカプランによる指標詞の分析が妥当でなくなる。したがつて、「指示対象が命題の構成要素である」ふらんへの特徴づけが失われる。これは「DR」(DR) が直観の直ふらんへ興味がなくなるふらんを意味してふらう。

(10) Donnellan [1966]を参照。

(11) 確かにこの読みは一般的でもなければ標準的でもない。しかし、この読みを否定するふらんはやがてふらんをわれら。

(12) の立場によれば、Numberg [1993], p.3.を参照。

(13) ゆめゆく、リードの内包的文脈と外延的文脈の区別がどのよべなゆのかは議論の余地がある問題である。しかし、少なくとも指示

の直接性が成り立つ場面に何らかの制限があることは直観的にも明らかないとではないだらうか。例えは Salmon and Soams [1988] (または同様の表題を持つ論文集) を見れば、命題的態度 (これは最も高い内包的文脈である) に関する直接指示の理論に対する議論が数多く提出されてくることに気付くだらう。

(14) 直接指示の理論に反対する立場は、指示の固定性には指示対象と主体の間の因果的関係が重要な役割を果たすと考える。その理由は、言語が我々にとって重要なのは、それが思考と結びついていこよいで我々の生活の中でも重要な役割を担つていてある (例へば、Devitt [1989], p.217-8.を参照)。一方、有名な直接指示論者であるJ.・アルモグやH・ウェットスタインは人類学としての意味論を標榜し、指示の固定性は社会制度として定められてくると考へる。Almog [1984]とWettstein [1984]を参照された。

(15) 例へば、Bach [1992], Reimer [1991], Roberts [1997].

#### 参考文献

- Almog, J. [1984], "Semantical Anthropology," *Midwest Studies in Philosophy* 9, 479-489.
- Almog, J., J. Perry, and H. Wettstein (eds.) [1989], *Themes from Kaplan*, Oxford U. Pr.
- Bach, K. [1992], "Intentions and Demonstrations," *Analysis* 52, 140-146.
- Colterjohn, J. and D. MacIntosh [1987], "Gerald Vision and Indexicals," *Analysis* 47, 58-60.
- Devitt, M. [1989], "Against Direct Reference," *Midwest Studies in Philosophy* 14, 206-240.
- Donnellan, K. [1966], "Reference and Definite Descriptions," *Philosophical Review* 75, 281-304.

- Kaplan, D. [1978], "Dthat," in Yourgrau [1990], 11-33.
- Kaplan, D. [1989], "Demonstratives," in Almog, Perry & Wettstein [1989], 481-563.
- Nunberg, G. [1993], "Indexicality and Deixis," *Linguistics and Philosophy* 16, 1-43.
- Predelli, S. [1998], "I am not here now," *Analysis* 58, 107-115.
- Recanati, F. [1993], *Direct Reference*, Basil Blackwell.
- Reimer, M. [1991], "Do Demonstrations Have Semantic Significance?," *Analysis* 51, 177-183.
- Roberts, L. [1997], "How Demonstrations Connect with Referential Intentions," *Australasian Journal of Philosophy* 75, 190-200.
- Saarinen, E. [1982], "How to Frege a Russell-Kaplan?," *Noûs* 60, 253-276.
- Salmon, N. and S. Soams (eds.) [1988], *Propositions and Attitudes*, Oxford U. Pr.
- Smith, Q. [1989], "The Multiple Uses of Indexicals," *Synthese* 78, 167-191.
- Wettstein, H. [1984], "How to Bridge the Gap Between Meaning and Reference," *Synthese* 58, 63-84.
- Yourgrau, P. (ed.) [1990], *Demonstratives*, Oxford U. Pr.

# On The Relation between Indexicality and The Theory of Direct Reference

Tora KOYAMA

The theory of Direct Reference is one of familiar views concerning reference of singular term. However, there are different opinions about what it is. In this paper, I will critically discuss the theoretical grounds of the theory based on D. Kaplan who introduced the notion of "direct reference".

The plausibility of the characterization of Kaplan is derived from his analysis of indexicals. According to it, propositions themselves are to be separated from the contextual dependency of the indexicals. Consequently, only the referents of the indexicals are relevant with propositions.

His analysis is accepted by many theorists, whereas linguists and philosophers who tend to concern strongly linguistics have pointed out the insufficiencies of Kaplan's analysis by presenting the examples against it.

Although these examples tend to be seen as derivative uses and not be considered seriously, in fact it is not easy to show that they should be separated ordinary uses. Rather, If we take into consideration adjoining instances which may be seen to share the indexicality, it seems that indexicals have the contextual dependency making such derivative uses possible.

This shows that the indexicals are more context-dependent than what Kaplan and his followers think, and that the directness of reference which leads us to the theory of Direct Reference doesn't follow it. Under an adequate view concerning the indexicals, direct referentiality would appear in another way.

## Key Words

indexicality, the theory of Direct Reference, indexicals, D. Kaplan.